

# 自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した

## 療育プログラムの検討(20)

—小学校低・中学年：活動への参加を高めるプログラムの工夫—

The care and education program development that support diversity and individual initiatives of children with autism spectrum disorder: Encouraging schoolchildren to participate in the activities

○操谷美沙<sup>1</sup>・谷千聖<sup>1</sup>・稲次望<sup>1</sup>・高磯伯羽<sup>1</sup>・松元佑<sup>2</sup>・荒木美知子<sup>3</sup>・荒木穂積<sup>1</sup>・竹内謙彰<sup>4</sup>

○KURITANI Misa<sup>1</sup>・TANI Chisato<sup>1</sup>・INAJI Nozomi<sup>1</sup>・TAKAISO Hakuba<sup>1</sup>・MATUMOTO Yuu<sup>2</sup>・ARAKI Michiko<sup>3</sup>・ARAKI Hozumi<sup>1</sup>・TAKEUCHI Yoshiaki<sup>4</sup>

(<sup>1</sup>立命館大学人間科学研究科・<sup>2</sup>立命館大学社会学研究科・<sup>3</sup>龍谷大学社会学部・<sup>4</sup>立命館大学産業社会学部)

(<sup>1</sup>Ritsumeikan University, Graduate School of Human Science・<sup>2</sup>Ritsumeikan University, Graduate School of Sociology・

<sup>3</sup>Ryukoku University, Faculty of Sociology・<sup>4</sup>Ritsumeikan University, Faculty of Industrial and Social Sciences)

Key words:療育プログラム, 参加度, 意識

### 目的

本グループは、小学校低・中学年の自閉症スペクトラム児を対象とした療育プログラムの開発を行っている。昨年度は活動に参加しにくい児童が多かったこともあり、本年度は児童の参加の程度を高めることをねらいとした。各活動ではさまざまな工夫をし、月ごとの児童の参加の程度を比較することで、活動のどのような要因が児童の参加の程度を高めたかを検討することを目的とする。

### 方法

参加児 6 名 (女児 4 名、男児 2 名) であった。各参加児の属性を表 1 に示す。

表1 プログラム参加児の属性(2020年3月現在)

性別	学年	所属	診断時期	参加期間	
C1	女	小4	通常学級	診断なし	6年0か月
C2	女	小2	通常学級・通級	3歳3か月	4年2か月
C3	女	小3	通常学級	3歳9か月	6年0か月
C4	男	小3	特別支援学級	5歳10か月	3年0か月
C5	男	小3	特別支援学校	3歳3か月	3年0か月
C6	女	小4	特別支援学級	3歳0か月	4年7か月

手続き 2019年5月から2020年2月にかけて、月に1回、120分の活動を行った。活動では毎回、50分の設定あそび(ex. 工作, 料理)を行った。各月の設定あそび内容を表2に示す。活動の様子はビデオカメラで撮影し、活動後に活動記録を作成した。

ビデオカメラの映像、活動記録を基に、各参加児の設定あそびへの参加の程度を月ごとにまとめた(表3)。表の作成にあたり、スタッフで検討を行った。参加児は一昨年度から変わらない。ただし、C6は都合により2019年10月より不参加であったため、今回の分析には含めなかった。

表2 各月の設定あそびの内容

活動内容
5月 スライム制作、スライムドッチ
6月 デカルコマニー制作
7月 うちわ制作、紙風船パレー
9月 釣りゲーム、トロピカルジュース調理
10月 宝探し、イラスト制作
11月 アドベントカレンダー制作
12月 サンタの靴下づくり、プレゼント交換
1月 ペットボトル倒し、ストラックアウト
2月 箱の中身クイズ、シルエツクイズ

### 結果

各参加児の設定あそびへの参加の程度を表3に示す。

	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
C1	○	○	○	○	○	—	○	—	○
C2	△	△	○	△	—	○	○	○	○
C3	—	○	△	△	○	○	○	○	—
C4	○	—	○	—	○	—	—	—	○
C5	△	—	△	△	△	△	△	○	○

\*○:最初から最後まで参加した △:途中から参加したか途中で参加した  
×:まったく参加しなかった —:欠席

表3から、年度の後半ほど参加児の参加が多くなる傾向がみられた。また、9月の活動への参加が弱く、それ以降徐々に多くの児童が参加するようになり、特に2月は欠席した参加児以外全員参加していた。9月「釣りゲーム」ではルールも十分周知されず楽しめずに途中で飽きてしまう参加児が多かった。それに対して1、2月は遊びのルールを参加児に周知するようにし、勝敗を競うなど楽しめる活動を用意する等の工夫をした。このことが参加児の競争意識を高め、また互いに仲間の活動にも注意し合うなど最後まで活動に参加する姿がみられた。

### 考察

前半に多かった製作活動は各参加児の好きな活動であり、各々集中していたのに対し9、1、2月は対決しあうゲーム的要素を取り入れた活動であった。9月はルール設定など十分ではなくバラバラに活動していた。その反省から1、2月では、ルール設定など児童が理解しやすく競争意識も高め合う様な工夫をしたことで全員参加するものになったと思われる。同時に、参加児が互いを意識した言動や他児を思いやる様子が見られるなど成長の姿を随所に見せるようになったことも参加の程度の高さの要因になっていると推察される。

\*本研究は立命館大学人間科学研究科の療育プログラム開発プロジェクトの一環であり、立命館大学の研究倫理の指針に基づいて進められている。研究発表にあたってはプロジェクト参加児の保護者の同意を得ている。